Peace Seeds
ヒロシマの10代がまく種

子どもが戦闘に加わる、あるいは加わらされている現実を、皆さんは知っていますか。アフリカ、中東、アジア、南米など紛争の起きる少なくとも36カ国・地域に、25万人いると言われています。大人に従わされ銃を持って戦うほか、大人の身代わりになって戦闘の最前線に立たされることがあります。

最近では、過激派に誘拐され自爆テロに使われる子どももいます。この悲しい状況は、貧困が原因になっているようです。国が貧しく、政府に不満を持つ反政府勢力や過激派が、子どもを戦力として使います。食べていくため、子ども兵になる少年少女もいます。

同じ状況はかつての日本でもありました。戦闘に巻き込まれた子どもは、ジュニアライターと同世代です。映画でもゲームでもない現実の話として、皆さんにも受け止めてほしいと願っています。

＜ピース・シーズ＞
平和や命の大切さをいろんな視点から捉え、広げていく「種」が「ピース・シーズ」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため、中学1年から高校3年までの27人が、自らテーマを考え、取材し、執筆しています。

第44号　戦闘に加わる子どもたち

25万人 未来奪われ前線へ

コンゴの武装勢力に入り、銃を構える少年兵（2003年撮影、テラ・ルネッサンス提供）

現状と課題は

NPO法人テラ・ルネッサンスの栗田佳典さん

アフリカで元子ども兵の社会復帰を支援するNPO法人テラ・ルネッサンス（京都市）スタッフの栗田佳典さん(30)に、子ども兵の現状や防止策を聞きました。

子ども兵とは武装勢力に入った18歳未満の少年少女を指します。5歳ごろで荷物運びなど戦闘以外に関わり、7歳ごろで銃を持つ子がいるそうです。背景には操作が簡単な銃が世界に広まったことが挙げられます。旧ソ連製の「カラシニコフ銃」です。旧ソ連解体後の1990年代、武器商人を通じ安く売られました。

もう一つは戦術のため。政府軍など大人の兵士は、子どもに銃を撃つのをためらいます。また子どもは洗脳しやすく、麻薬などで正常な判断を鈍らせ、隊の先頭で「盾」として使われます。命を落とすと次の子が「補充」されます。

7歳から銃持ち「盾」に
武器規制し貧困減らそう

子ども兵には自らの意志でなるほか、反政府勢力に誘拐されてなる場合があります。子どもは決死の覚悟で逃げるか、政府軍に保護されるまでグループに入り続けるしかないのです。テラ・ルネッサンスはウガンダで、元子ども兵の自立を促すセンターを運営。洋裁や大工といった職業訓練、英語や算数の教育、平和教育、心のケアを続け、192人を受け入れました。

栗田さんは過激派組織「イスラム国」（IS）の出現などで子ども兵は「さらに増えているのでは」と心配します。自立支援を進めて貧困を減らし、武器の取引を制限する「武器貿易条約」を多くの国が守り、子どもが武器を持てない世界をつくることが必要と考えます。「平和な日本で暮らす10代もこの事実から目を背けず、考えてほしい」と訴えています。（中2岩田諒馬）

ボコ・ハラムの脅威から逃れるため、チャド湖周辺のキャンプ地に移った少女たち（OCHA提供）

日常的に暴行／トイレ時も見張り

過激派になぜ参加

「普通の子」誘拐され強制
食料・居場所目的に志願も

アフリカではナイジェリアを拠点にするイスラム過激派ボコ・ハラムが、周辺国でも少年少女を自爆させるテロを続けています。広島市出身で、隣国チャドの国連人道問題調整事務所（OCHA）に勤める木村真紀葉さん(29)に、現地の様子を聞きました。

チャドの難民・避難民のキャンプ地は主に3カ所あります。このうち西部のチャド湖周辺に、ボコ・ハラムに家が破壊されたり命が狙われたりしたナイジェリアやカメルーンの難民、チャドの避難民が集まります。非政府組織などと協力して効率的な支援を進めるのがOCHAの仕事です。

「日本と同じ普通の子が巻き込まれている」。ボコ・ハラムの脅威について木村さんはそう指摘します。国連児童基金が4月に発表したリポートを基に、過激派に誘拐された少年少女が自爆させられる実態を説明してくれました。「普通の子」ゆえに検問で危険かどうか区別するのは難しいそうです。

チャドの難民キャンプの状況について説明する木村さん

子どもを誘拐する過激派に入る若者は後を絶ちません。国が貧しいのに対し、グループに入れば食料を得られ、自分の居場所も見つかるからです。防ぐには「教育や職業訓練で若者を支援し貧困率を下げること」と木村さんは強調します。しかしお金と時間がかかり、その日生きるための支援が最優先の現状では、なかなか手が回らないそうです。（高2上岡弘実）

誘拐後の実態は

国連児童基金がまとめたリポートを基に、ボコ・ハラムに誘拐された子どもの体験を紹介します。

子どもは監視を受けながら、料理や掃除、水くみ、まき集めなどの仕事を選ばされます。13歳ほどの少年はバイクの運転を教えられ、燃料や戦闘員を運搬。他の子どもは、誰かが逃げたら殺すと脅され、他の子を見張ります。

少女は夫を割り当てられてレイプを繰り返し受けます。13歳ほどの少女が妊娠しても、医療的なケアすらない中で出産します。暴行は日常的で、トイレに行く時も見張りがいます。

2014年1月から117人の子どもがナイジェリア、ニジェール、チャド、カメルーンでの自爆攻撃に使われました。その80%以上が少女です。子どもは腰にベルトで爆弾を着け運ばされますが、命令の内容を理解しているかはっきりしません。

大人は子どもを見ると怖くなり、自爆するかもしれないという恐怖から信用できなくなっています。子どもが逃げて地元に戻ったとしても、社会復帰は難しいそうです。（高1岡田日菜子、中2田所愛彩）

「少年たちの戦場」昨年出版
那須 正幹さん

戦争しないことが解決策

日本の少年兵をテーマにした作品を書いた那須さん（撮影・中2岩田諒馬）

昨年出版された児童書「少年たちの戦場」は、戊辰戦争や第2次世界大戦に加わった少年4人の姿をつづっています。作者の児童文学作家、那須正幹さん(74)＝防府市＝は「戦争の被害者だけでなく、加害者にもなった子どもが存在した歴史を描き、戦争の全体像を読者につかんでもらいたかった」と話します。

奇兵隊に加わり、長岡藩（現新潟県）との戦いで敵を殺す下関出身の少年▽多くの犠牲を出した二本松少年隊をモチーフにした二本松藩（現福島県）の少年▽満蒙開拓青少年義勇軍として旧満州（中国東北部）に向かった少年▽国内で唯一地上戦のあった沖縄の学徒通信兵―を描いた4話です。

那須さんは専門書をひもとき、現地を取材。戊辰戦争に加わった下関の少年のように、ご飯が食べられ、ある程度の暮らしが保証されると単純に思い込み、戦いに参加した子も多くいたのでは、と話します。

物語の主人公4人のうち3人が亡くなりますが、死を美談のように書かず、心の揺れ動きにも余り触れません。淡々と描写するのは、読者が想像力を発揮し考えるよう作品を「タイムスリップできる道具」に仕立てたかったからです。

最後に「少年兵をなくすには」と尋ねると「戦争をしないこと」と答えた那須さん。3歳の時に被爆した自分の責任として、反戦のメッセージを送ります。誰もが武器を持たない世界になるよう「ニュースや選挙を通じリーダーを見極める目を持つことが大切」と強調しました。（高3見崎麻梨菜、高1池田杏奈）

次回は6月15日に掲載します。
ジュニアライターが取材後の感想をつづった「編集後記」を、中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターのウェブサイト（http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=71774）にアップします。